

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 74

2020.4.3 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第74回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『ふるさと春日井の文化・教育に尽くした人々』



講師：塚田 忠雄 氏

会場風景

2020年（令和2年）3月1（日）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ「ふるさと春日井の文化・教育に尽くした人々」で、塚田忠雄氏（本会副会長、春日井郷土史研究会会員）に発表いただきました。小学生全員が習ういわゆる「郷土読本」は、非売品で親や市民が見る機会ほとんどないものを、もう少し詳しくこれらの人物を調べて報告されました。

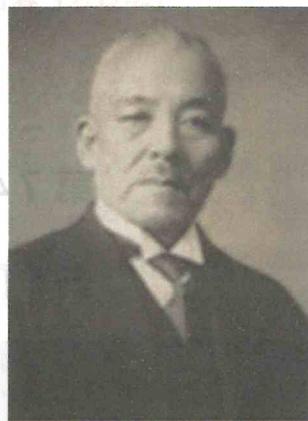
参加者は9名でした。新型コロナウイルスの流行拡大により3月2日から市内小中学校の休業が決められたという状況もあり、多くの市民が参加を躊躇されたものと思われます。

《講演要旨》

春日井市の教育や文化の発展につくした人びと」が春日井市教育委員会発行『わたしちのまち 春日井』に載っている。昭和46年に初版が出され、改定されながら今日まで小学校の社会科副読本として小学3・4年生全員に配布され使われている。「発展につくした」4人とは、①足立聰、②林長三郎、③河田悦治郎、④安藤直太郎で、4年生の教材(P104、105)になっている。①では春日井市で初めて近代的な病院をつくった。市長になった。苦小牧製紙を招いた。市民病院をつくった。②鳥居松駅をつくるために活躍した。③養蚕家になって、

養蚕の研究をすすめ、温度によって成長をはやくする方法をみつけ、河田養蚕伝習所をつくった。④小・中学校の先生になり、市内 15 校の校歌をつくった。小学生に教えられる要点は以上である。

I. 河田悦治郎について … (1)2013 年 4 月に「上田楽の蚕種製造記念碑と往年の繁栄～取り残された河田蚕種製造所の跡地に碑」の調査研究を認めた。河田悦治郎についてはこれまで何方が研究されていて、付け入るスキのないテーマと思い込んで、河田蚕種製造所を買収した鐘淵紡績(株)が昭和 10 年に昭和産業(株)、昭和 24 年に鐘淵紡績(株)に復帰し、昭和 33 年に鐘淵紡績(株)河田蚕種製造所として分離した。昭和 47 年に蚕糸專業のカネボウシルク(株)に改組、昭和 58 年にカネボウシルクエレガンス(株)に改組、平成 8 年に閉鎖した。その研究所長宮下民雄について調べ、2016 年 3 月刊『春日井郷土史第 2 号』に



河田悦治郎

載せた。今回、「春日井の発展に尽くした」4 人について調査する中で、河田悦治郎研究は、その業績が実証研究としては不完全なものだと気づいた。日本の養蚕事業の発展に貢献した実業家としての評価を実証する客観データに基づく功績を改めて見つめ、検証する機会とした。

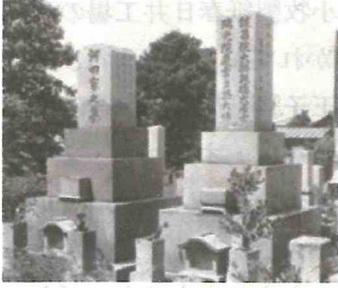


(2) 河田悦治郎は昭和 5 年、河田製造所の拡張工事を行い、蚕種検査所 3 棟、三階建て製造所 11 棟、事務所を完成させ、工員 1800 人を雇用し、生産額で全国一とした。しかし、昭和 7 年 68 歳でなくなった。すでに、国立蚕糸試験所で優秀蚕品種が次々として、民間育成の品種は衰微する時代であった。昭和 15 年、国立蚕糸試験所から沓掛久雄氏を招聘し蚕品種の育成研究に本格的に乗り出し

たが、宮下民雄氏の功績さえも顧みられず、閉鎖への道を歩む。現在上田楽町北条の公民館敷地に「蚕種製造記念碑」が置かれているが、ここには河田蚕種や河田悦治郎のことは書かれていない。あくまで、鐘紡(株)の代表取締役兼社長の帆足隆が「当社は…」と書く記念碑である。1996 年 10 月吉日とある。ブランド Kanebou Silk が我が国の蚕糸業の発展に大きく貢献し、又栄光あるブランドの礎を築いたと記されている。



(4) 河田蚕種製造所の実証的評価について、蚕種製造日本一達成の河田悦治郎「蚕種改良の趣意」、「愛知県蚕種製造業者上位五社一覧」で昭和 2 年に愛知県で 1 位、昭和 5 年に製造額日本一となった「土地制度史学第 111 号」のデータを紹介した。また、「日本製糸業史」から「蚕種生産量の比較」(長野・静岡・愛知・群馬・埼玉・福島)を紹介し、特に、対長野県比で、昭和 3 年に 43.5%、昭和 9 年 42.2%と追いついていっ



たデータを示した。㊸河田悦治郎は昭和6年没著書「養蚕必携」は国会図書館に残されており、「養蚕指針」(大正15)「養蚕法指針」(明治45)は河田伝習所の受講生や一般養蚕家に配布されたもので、養蚕の普及に尽く

した足跡を残す。日本一となった実業家河田悦治郎の墓は、田楽の新徳寺に墓があると聞いて訪ねたが、すでに墓じまいされていた。墓石が片隅に残されていた。春日井の偉人は廃墓石となっている。親族が東京に墓を移したという。春日井市の文化財課が、せめて説明版を建てるべきだと思う。春日井市の発展につくしたと小学生に教える一方で、情けない話である。Ⅱ. 民選市長の初代、足立聰 … (1)東春日井郡でただ1つの近代的病院を創り、市長になった人と小学生に教えている。春日井市の公式史料となる「春日井弘報」は昭和



足立 聰

18年7月1日発行で、「勝川時報」を引き継いで発行された。時局柄、発酵枚数が制限され、各部落界隣組に配布され、全戸配布ではなかった。第1号では、春日井市市制施行に伴い市長臨時代理者安達英一が「御挨拶」を載せている。「今や大東亜戦争は、愈々決戦期に突入し、敗戦に喘ぐ米英は其豊富なる物資にも言はせ…」と挨拶している。同紙「7月の常会徹底事項」には「一、戦争生活の徹底的な実践」「二、食糧の非常増産」などが書かれている。同年8月1日の第2号には、「市会議員総選挙に就て」が書かれ、「強力にして明朗なる翼賛市会を確立すべく御協力をお願い…」が書かれている。9月1日の第3号に、市会議員決定が載り、大字勝川の足立聰や和爾良の梅村義一の名が載る。昭和19年1月の第7号に、安達英一は市長として、足立聰は市会議長として年頭の辞や年頭の所感を述べている。残念ながら、昭和20年10月に内務省に市長候補を推薦せよとの通達があり、市議会で足立聰を市長とする市議会決議がされたが、この事実を記録する「弘報」は保存されていない。

官撰市長第2代が、民撰市長第1代目になったが、この頃の「春日井弘報」は残っていない。弘報(広報)に欠落があるのは恥ずかしいことである。公文書管理の意識が足りない。春日井市社会教育委員の井上博氏(1971.10没、74歳)が「春日井の人物誌」に足立聰氏について書いているが、多分に思い入れの部分があると客観性のあるところを紹介した。大正13年に、スイスのベルン大学で細菌学を修めドクトル・メジチーネ(医学博士)となる経緯が書かれている。昭和3年に愛知医科大学で医学博士の学位を得、1月に足立病院を開設した。昭和63年刊「郷土誌かす



がい第 33 号」に人物誌の後半が載る。足立聰の功績の 1 つに苦小牧製紙春日井工場の春日井誘致の実現がある。その経緯については「春日井市史」にも書かれておらず、また、先の「人物誌」にも書かれていない。経緯を詳しく書いているのは『王子製紙社史～戦後三十年の歩み』である。昭和 57 年 2 月に刊行された。その中に、エリザベス・オリバー・ブキャナンが名古屋地区司令官デバッシュャー大佐から春日井在住のブキャナン神父を通じて、足立市長に「来る(昭和 26 年 3 月)19 日に苦小牧製紙社長とともに出頭されたし」と連絡があったと書かれている。この記述の「神父」とあるのは間違いであることをつきとめた。ブキャナンは女性で、鳥居松の美園幼稚園園長であったことも突き止め、写真も入手した。彼女の自宅のあった場所も突き止めた。大きな務めを果たした人だった。幼稚園の園長であったので、当時の園児や父母が知っているというひとが結構いた。美園幼稚園は春日井市最初の幼稚園であった。キリスト教布教の使命をもって活動した。幼稚園ではブキャナン先生と呼ばれていた。

(記録：塚田忠雄)

〈会報編集後記〉

『会報 74』の編集作業をしている 4 月当初から、新型コロナウイルスの感染状況が日増しに厳しさを増していく情勢でした。2 月から国会では鋭意防疫対策を取ってきているはずであったにもかかわらず不安は増すばかりの情勢です。人と人との接触が根本的原因とのこと、3 密（密閉・密集・密接）の揃った場所へは行かない、作らないとして、あらゆる活動、外出を自粛するように国、自治体の要請が矢継ぎ早に発信されています。人間社会は経済活動を暮らしの基盤として成り立っていることを考えれば、外出も、経済活動の制限には限界があります。最優先して行わなければならないことは、ウイルスの完全防疫体制とそれに伴う人間の意識ある行動であることは誰でも理解できることです。であるにもかかわらず感染拡大は止まりません。海外の悲惨な状況をテレビの画面を通じて見ながら、何故早急に有効な手が打てないのかとハラハラ、イライラ、外出もままならずストレスを蓄積してゆくばかりの日々です。

未曾有の人類史的出来事に直面して、この危機をどのように乗り切ってゆくのか、乗り切ったのかは後の歴史が語ることになるでしょうけれども、今生きている我々がどのような行動をしてどのような英知を傾けたかが、厳しく歴史の中で問われることになりました。

長い人類史の流れの中で、天然痘、ペスト、コレラ、インフルエンザ、結核、エイズ、エボラ出血熱、と数々のウイルス細菌と戦ってきた歴史を考えたときに、多くの尊い犠牲を払いながらも乗り越えてきた人間社会は、今回も先人達と同じように乗り越えてゆくであろうことは確かであることを信じ、今は、やがて終息した後のことに考えを致しながら、反省と課題を生かしながら「ピンチをチャンス」に変える新しい発想に基づく経済活動、社会活動が求められて行くのではないかと思われてなりません。その意味では「歴史は繰り返す」の法則どおり、新しいモデルの人間社会が登場することになるでしょう。(文責：河地 清)